二巻本世俗字類抄の音注「如音」

二戸 麻砂彦

A Study of Original Phonetic Glosses in "Sezokujiruisyō" Edited by Two Volumes

NITO Masahiko

Abstract

Japanese Dictionaries in Heian period has been inflected by Chinese Dictionaries. These are divided into three classes, Bushu (部首 : parts of Kanji), Igi (意義 : meanings of Kanji) and Jion (字音 : readings of of Kanji) from the point of view about there search systems. These search systems were not fit for Japanese Language. And so, Dictionaries by the use of Iroha (イロハ) search system were composed in late Heian period. "Sezokujiruisyō" is one of them. This study analyzes Original Phonetic Glosses (如音) in "Sezokujiruisyō" edited by two volumes.

キーワード：世俗字類抄、如音、日本漢字音
Key Word : Sezokujiruisyō, Original Phonetic Glosses, Sino-Japanese

0 はじめに
1 字類抄諸本(1)の編纂意図と系統
2 二巻本世俗字類抄の字音語
3 二巻本世俗字類抄に見出す「如音」
4 ラ行音語彙の音注
5 おわりに

0 はじめに

世俗字類抄は和訓語彙の集約を目指して編纂された文献であり、見出し語たる掲出字には多数の和訓を付載していること、言うまでもない。その中には字音注記（反切・同音字注(2)・仮名音注）を見出すこともある。二巻本の場合には、加えて「如音」(3)という独自の音注が存する。本稿では、この「如音」について、他の音注表記との違いに言及しつつ、その実態を明らかにしたい。また、同じ世俗字類抄ながら、七巻本(4)に存しない理由についても考えたい。なお、二巻本世俗字類抄は東京大学国語研究

山梨県立大学　国際政策学部　国際コミュニケーション学科

室蔵本[5]（東大本と略称）と天理大学附属図書館蔵本[6]（天理本と略称）とが現存する。両者を対象としたが、例示は東大本を主に掲げた。

1　字類抄諸本の編纂意図と系統

世俗字類抄や色葉字類抄など字類抄諸本（単に字類抄と称する文献はないが、節用文字などを含む諸本の総称として用いる）は、平安時代末期において常用する基本的な語彙としての和名を塊集し、対応する漢字見出しのもとに掲出字を選択していく、という編纂の原則を持って望んだ。いわゆる「色葉和名」とも言える体裁である。まず和名をもって塊集をするとなれば、その分類体裁としてイロハ順の検索が採用されたのは自然な成り行きと言える。また、これら当時の辞書は漢文の訓読や作成において活用が期待されたであろうから、和訓だけではなく、掲出字の字音を求める場面もあったはずである。増補改編が進む中、この要請には反切・同音字注・仮名音注を付載することで対応した。字音注記としては字類抄諸本に限らない一般的な方法と認められる。このことから、字類抄諸本の編纂過程は概ね次の二段階を想定できる。

A　いわゆる「色葉和名」の基準による和訓語彙の塊集
（分類体裁としてイロハ順の検索を採用した初期段階）

B　語彙数の増加と字音の付載
（利便性の向上を目指した増補改訂段階）

一方で、字類抄諸本の系統関係は、いまだ不明の点が多い。世俗字類抄の場合、二巻本が七巻本より前に編纂されたものであること、その内容からも首肯できるが、色葉字類抄諸本との関係が明らかとは言えない。二巻本色葉字類抄[7]の奥書によれば、根本書たる二巻本の「色葉和名」をもとにして、四巻構成の書本「橘先生之本」は校訂されたようである。これをさらに細分化して、八巻の構成としたのが奥書作者であろう。この二巻本「色葉和名」自体が原形本に該当するのか、あるいは、鎌倉初期の書写になると推定される川瀬一馬蔵零本[8]を原形と見立てるべきか、判然とはしない。直截的な親本とは断定し得ないが、改訂を経た四巻本の「橘先生之本」が色葉字類抄諸本の基盤になったことは想像できる。二巻本の色葉字類抄が上上・上下・下上・下下という四巻構成であることが示唆的であろう。該当箇所を掲げる。

【二巻本色葉字類抄の奥書】

○傳二借橘先生之本一、彼人於二本色葉和名一更加二功労一加二文字一、正声無レ極勝本也、…（巻上上・四九オ二～三）

○自二天養比一至二于長寛一廿余年、補綴无レ隙、抑部類如レ舊更加二星點一、紕繆雖レ多愚昧難レ直、學者毎レ見、可二摺改一之、誂貢士入道詞字少〻加二朱點一、為レ要二文不迷一也、傳二借橘先生之本一、為二書本一而已、…根本書者、上下両巻也、橘先生本開為二四帖一、今又開為二八帖一而已、…（巻上下・五三ウ三～七）

いまだ字類抄諸本の相互関係を明らかにはできていないが、次のような諸点については、共通の理解を得ているという指摘[9]がある。

1　原形本は最も古い姿を伝える。
2　『節用文字』と『世俗字類抄』との前後関係は、なお、確定していない。
3　『世俗字類抄』は、『色葉字類抄』より古態を保つ。
4　二巻本は、他の諸本より古態を保つ。
5　『十巻本伊呂波字類抄』は、『三巻本色葉字類抄』を増補したも

のである。

部立て・部名・各部の配列順序・篇名の「付」注記などに注目して、字類抄諸本の系統関係を想定しつつ系譜図を掲げている。しかし、その図が直ちに現実の派生関係を示すものではないと断っており、むしろ、次の指摘[10]に注目したい。

字類抄は『世俗字類抄』を基に、二方向に展開した。編纂整備を徹底させる方向と原形態を保持しつつ、主として増益を図る方向とがそれである。前者は、『色葉字類抄』系諸本、殊にその三巻本として具現した。また、後者は、『十巻本伊呂波字類抄』にその例を見ることができる。

しかし、これらの指摘には音注を含めた分析が十全ではないように思われる。そこで、指摘の蓋然性が高いのかどうかを、字類抄諸本に付載された各音注の状況から検証を試みる必要がある。二巻本世俗字類抄に散見される字音注記としては反切・同音字注・仮名音注が存する。反切は二八例あり、説文・玉篇・本草疏などを中核的な典拠として編纂された切韻系韻書[11]を参看した可能性が高い。この点は、すでに分析した経緯[12][13]がある。その結果を掲げておこう。なお、同音字注は一一例を数えるが、その出典を明らかにはできていない。別途分析を試みる予定である。

『原撰本』系諸本の段階

和名という基準で常用語の塊集を目指したため、原則的に字音の把握を具体化する音注等はなかったと推測する。

『世俗字類抄』編纂の段階

常用語の範囲を拡大しつつ、字類抄の基盤を確立する改訂がなされた。その過程で、初学的な漢文の訓読や作成に資する音注が限定的に付載された。反切の数は少なく、主に『切韻』『玉篇』などを引用する先行文献によるものと考えられる。

『色葉字類抄』編纂の段階

辞書利用の利便性を高めるために、掲出語数を格段に増加させ、意義分類の整備や見直しをも図っていった。高度な漢詩文の作成や運用も考慮され、その一環として、相当数の反切が付載された。基本的に『世俗字類抄』改訂段階での反切は継承せず、新たに『切韻系韻書』のそれを転載した。ただし、人事・辞字両部では付則的に『玉篇』の反切をも添加している。

原形本を含む原初段階を推定して『原撰本』系諸本と呼び、音注表示はなかったと推測したが、あるいは同段階で音注が付されていた可能性も完全に否定はできない。なぜならば、すでに定着していた字音語や字音以外に読みのない語も選択しているからである。その場合、すべてに音注を付けないこともあり得るが、掲出字の理解に必要と判断した限定的な場合には、何らかの音注を付載したかもしれない。あるいは、世俗字類抄の成立初期に音注が加えられた可能性もある。右の結果を踏まえて、その候補となる音注が「如音」ではないかと想定される。

2　二巻本世俗字類抄の字音語

和訓語彙を基本にして塊集した世俗字類抄であるが、件の「如音」を検討する前に、果たして音読みするべき語彙、すなわち字音語がどの程度含まれているのであろうか、意義分類である部[14]別に字音語の実態を探ってみる。まずは、イロハ順の始め伊篇[15]から分析する。

天象　付歳時　（字音語なし）
地儀　付居処居宅具　攸記イウキ
植物　付植物具　（字音語なし）
動物　付動物躰　（字音語なし）
人倫　付鬼神類　（字音語なし）
人躰　付病瘡類　（字音語なし）
人事　付術藝并産業　淫欲
飲食　（字音語なし）
雑物　衣架イカ・椅子イス
光彩　付繪丹并染色類　（字音語なし）
方角　（字音語なし）
員数　（字音語なし）
辞字　（字音語なし）
重点　（字音語なし）
畳字　一一
一割・一渧ティ・一定・優怒・優免・優美・雄飛イウヒ・雄稱・意略・意趣・異様・引汲・引率・引導・逸物・淫奔・慇懃・因縁・由緒・一切・誘引・移徙イシ・優長・異紹・伊欝・因准・婬欲・夷狄・異域・猶願・優遊・意氣・有識・威猛・有若已・一字千金・一人當千
諸社　（字音語なし）
諸寺　付霊駿処　（字音語なし）
國郡　付名所　（字音語なし）
官職　醫博士
姓氏　（字音語なし）
名字　（字音語なし）

畳字部は二字以上の熟字六八例を掲げており、そのうち字音語は三七例と半数、さらに仮名音注が加えられているのは「一渧　ティ」「雄飛　イウヒ」「移徙　イシ」三例である。和訓に基づく語彙のイロハ順塊集という編纂の基本を持ちながらも、漢文の訓読や作成を避けては通れない環境があったことを、これは物語っていよう。もともと掲出字は少ないが、重点部にも「一一」のような字音語を見出すことがある。

しかし、他の部では字音語の掲載が相当に少ない。地儀部は冒頭に「池」「槭　イキ」という例がある。和名類聚抄[16]を参看すると、やはり「池」と「槭」とが連続して掲げられている。その同音字注「音威」から「槭」は字音語とも受け取れるが、和名「以比」をもって掲出したと考えた方がよい。池を囲む堤の意味であろう。よって、伊篇の地儀部には字音語がないと認める。

池　玉篇云池直離反畜水也和名以介
槭　音威准南子云決塘撥槭許愼云槭所以通陂竇　和名以比
（元和古活字本和名類聚抄／巻一・河海類第一〇・一六ウ6～8）

地儀部末尾近くの「攸記」は「板敷」と「甍　イラカ」の間に置かれている。これは字音語と見る他はない。二巻本色葉字類抄では、禁裏の「郁芳門」「殷富門」などの後、地儀部の終端に「悠記所　イウキソ　大嘗會之時云

在也」（尊経閣文庫蔵二巻本色葉字類抄／上上・伊・地儀2ウ4）とある。二巻本世俗字類抄と同じく、訓読語が先にあり、字音語が後ろに配されている。

人事部にある「淫欲」は字音語であるが、これは書写上の字形が近似する「慤羨」の誤認かと想像する。二巻本色葉字類抄は「謚 ィミナ 諱 慤羨 已上同」（尊経閣文庫蔵二巻本色葉字類抄／上上・伊・人事5オ3）である。天理本も同様に誤認しており、「謚諱 ィミナ 諱 同 淫 欲」（巻上・四オ8）となっている。これは「淫」を掲出字とし、割注左に「欲」を配する形で、やはり「淫欲」と捉えたものか。よって、人事部は字音語なしと見なす。

雑物部には「衣架 ィカ」「椅子 ィス」二例がある。末尾の配置ではなく、訓読語の中に混在している。すでに漢語から移入定着して久しく、字音語である意識が希薄な語彙と思われる。再び和名類聚抄を掲げる。

衣架　爾雅注云竹＋施(17)音移字亦作禾＋施和名美曾加介　懸衣架也
（元和古活字本和名類聚抄／巻一四・坐臥具第一八八・一六ウ4）
倚子　本朝式云紫宸殿設黒梯倚子
（元和古活字本和名類聚抄／巻一四・坐臥具第一八八・一七オ2）

和名類聚抄では「倚子」に対して和訓がない。おそらく早くから字音語として定着していた可能性が高いことを示している。代表的な仮名文献である源氏物語においても「いし」三例が確認できる。それに対して、一方の「衣架」は仮名文献に出現することが少なく、ようやく宇津保物語と古本説話集に見出した。字音語「いか」と読んだ可能性はある。ただし、源氏物語には「みそかけ」という訓読語があり、和名類聚抄の指摘する「和名美曾加介」も使われていたことになる。早期に字音語が定着していたとは言い切れない。

おはします殿の東のひさし、ひがしむきにいしたてゝ、くわざの御座、引いれの大臣の御ざ、御前にあり。
（首書源氏物語(18)・桐壺 0014-12／源氏物語大成(19) 0024-11）
しん殿のはなちいでを、れいのしつらひて、らでんのいしたてたり。
（首書源氏物語・若菜上 0659-03／源氏物語大成 1080-07）
南のひさしのみすあげて、いしたてたり
（首書源氏物語・宿木 1104-03／源氏物語大成 1777-03）
御しつらひなどもかはらず、みそかけの御さうぞくなど、れいのやうにしかけられたるに、女のがならはぬこそなべてさうぐしくはえなけれ。
（首書源氏物語・葵 0203-04／源氏物語大成 0325-14）
つぎて簀子に蒔繪の棚、机七つ立てゝ、廂に御簾かけならべたてゝ、よきけづり棹わたして、色〻の御衣共色を盡し、ときホどき、おほいかをならべ、御調度色を盡し、シなを整へ、御鬘ども丈を整へ、數を盡して、方〻〈ニ飾ラ〉れたり。
（宇津保物語(20)・祭の使 432-06）
御いか懸かりたる御衣を召して、被けさせ給て、「すみやかに寺に帰りて、御祈りよく〳〵せよ」と仰せらるれば、悦びてまかり出づる程に、僧俗の見合ひたる程いみじくやむごとなし。
（古本説話集(21)・巻下・五二「極楽寺僧施仁王経験事」462-15）

官職部「醫博士」は、律令制の大学寮における「明経博士・紀伝博士（文章博士）・明法博士・算博士・音博士・陰陽博士・暦博士・天文博士・漏刻博士」などと同じで、これらも早くから定着し、夙に字音をもって読んでいたであろう。

ここまでは、伊篇を代表として、字音語の掲出状況を分析した。それに

よれば、字音以外に読みのない語、あるいは字音が定着して久しい語、これらが部分的には含まれる場合があると言える。しかし、二字以上の熟字を集めた畳字部を除いて、字音語の数は少ない。よって、和訓をもって語を塊集し色葉に分類するという編纂の基本は保持されていると認められる。この傾向は伊篇以外にも当てはまる。

次に、二巻本世俗字類抄上巻末尾にある無篇の字音語を掲げる。畳字部以外には字音語を見出せない。しかも、仮名音注による字音表記がない。伊篇では畳字部の字音語三七例のうち三例に仮名音注が付けられていたが、この無篇のように、おそらくは原撰本段階の編纂過程において仮名音注は存在せず、二巻本世俗字類抄の成立初期に至っても原則的には付載されなかったと想定する。現存の東大本や天理本に残る字音語の仮名音注は、増補改訂の段階あるいは後の書写で付与されたのではないか。

天象　（字音語なし）
地儀　（字音語なし）
植物　（字音語なし）
動物　（字音語なし）
人倫　（字音語なし）
人躰　（字音語なし）
人事　（字音語なし）
飲食　（字音語なし）
雑物　（字音語なし）
光彩　（字音語なし）
方角　（字音語なし）
員数　（字音語なし）
辞字　（字音語なし）
重点　（当該の部なし）
畳字　謀反・無道・無礼・無益・無力・無実・誣告・無懺・宜哉
諸社　（字音語なし）
諸寺　（当該の部なし）
國郡　（字音語なし）
官職　（当該の部なし）
姓氏　（字音語なし）
名字　（字音語なし）

さらに、二巻本世俗字類抄下巻の志篇における字音語の状況も考察する。どの部も和訓語彙である訓読語が多数にわたる。それでも、志篇畳字部は二字以上の熟字による字音語一三九例を数える。伊篇や無篇に比して、これはかなり多いと言える。その他の部でも、字音語は見出せる。地儀部においては、字音語の把握に正確を期するため、「鐘 シュ 楼」「食 シキ 堂」のような仮名音注が存する。加えて、字音表記と思われる「城 如音」もある。しかし、字音を示すために二つの方法を採用する必然性があろうか。動物部の「麝香 シャコウ／如音」に至っては、両字音表記が併存する。初めに仮名表記があったとすれば、その後さらに「如音」という字音表記を加えることには意味がない。むしろ、字音表記の「如音」が先に付載され、後に仮名表記が添加されていったと考える方が自然である。雑物部にある「承塵屋」の場合、和名類聚抄に見える割注「此間名如字」が示唆的であろう。該当する和訓がないため現状では字のまま受容せよ、すなわち音読みせよという指示である。積極的な字音表記ではないが、事実上「如音」に等しい。この雑物部には「史 如音」「什 如音」「章 如音」三例がある。訓読みを期待しない字音語であることを表している。

天象　（字音語なし）
地儀　磁石・庄・城如音・省・舎・宿・鐘シュ楼・食シキ堂・進物所
植物　紫苑シヲム・菖蒲・薔薇・墻縻・紫檀・椶櫚
動物　猩〻シャウ〳〵・麝香シャコウ／如音
人倫　師如音・臣如音・衆如音・親戚
人躰　浸淫瘡シンミサウ
人事　爵
飲食　（字音語なし）
雑物　麈尾シュヒ・障子・床子・質・象眼シャウカン・承塵屋・承足・
　　史如音・頌・什如音・章如音・孺子シュス
光彩　朱砂・朱漆・雌黄
方角　（字音語なし）
員数　銖・尺・勺
辞字　（字音語なし）
重点　啾〻・子〻・生〻・種〻・孜〻・色〻・所〻
畳字　晨昏・夙夜・士女・咫尺・施行・施張・辞退・辞遁・次第・
　　資貯・資具・資財・資儲・徙倚・使乎・雌雄・雌伏・始終・
　　緇素・緇銖・視聴・振動・振儀・自讃・自嘆・自然・自由・
　　自在・自恣・思量・神妙・神慮・神明・神霊・神令・神社・
　　神人・神民・神速・真實・真偽・進士・進退・親近・親族・
　　親昵・心労・心喪・進發・瞋恚・實検・信愛・信録・信否・
　　辛苦・質券・習礼・執當・斟酌・執行・執啓・執達・尋常・
　　質直・色目・賑給・嫉妬・失礼・失錯・職掌・拾謁・讎敵・
　　讎校・辰合・差別・悚宗・蹂躙・所據・證明・證據・悚息・
　　修理・修造・修行・首途・鍾爰・裝束・承引・承諾・商量・
　　生益・取捨・須臾・取納・將来・庶幾・咒咀・賞罰・勝負・
　　勝劣・勝形・勝地・巡撿・巡役・巡給・巡年・准據・准擬・
　　准的・借貸・宿債・主従・悉曇・裝横・處分・所負・所課・
　　所縁・所渋・所司・縦横・剰闕・昇座・執鞭・出挙・出納・
　　出入・出凡・縦容・松容・種類・種性・庄厳・聚楽・児女・
　　序破急・娑婆・處名
諸社　（当該の部なし）
諸寺　書寫山
國郡　（字音語なし）
官職　式部省・修理職・侍従・助教・進・掾・將監・侍醫・次官・
　　書博士・針博士・史・進士・秀才
姓氏　（字音語なし）
名字　（字音語なし）

承塵　釋名云承塵　此間名如字　施於上承塵土也
（元和古活字本和名類聚抄／巻一四・屏障具第一八七・一六オ5）
障子　漢語鈔云障子　屏風之屬也
（元和古活字本和名類聚抄／巻一四・屏障具第一八七・一六ウ2）

このように、伊・無・志の三篇とも、字音語を含んでいるが、多くは畳字部に集中している。二字以上の熟字で構成される畳字部には、必然的に字音語が多数掲出される。畳字部を除く各部の字音語は少数（畳字部以外には字音語が存在しない篇もある）であり、その中は、訓読みの存在しない語、音読みが定着して久しい語、両者の比率が高い。おそらくは、常用するという基準をもって、漢文作成などに必要となる字音語を選択したと考えられる。伊・無・志篇以外の各篇も同じ傾向にある。当時の識字層においては、すでに字音語を使わずして、その言語活動ができない状況にあったとも言えよう。

3　二巻本世俗字類抄に見出す「如音」という音注

字音の把握という観点から、二巻本世俗字類抄における「如音」という独自の音注、これは「音の如（ごと）し」「音に如（し）くあれ」「音に如（したが）ふ」などと読むことができよう。今は類聚名義抄[22]の和訓を参照し、「音にしたがふ」[23]と読んでおく。すなわち、見出し語たる掲出字を音読みせよという指示と考えたい。基本的には、見出し語の漢字に対して代替すべき和訓がない、あるいは音読みが定着して久しい場合と認められる。

如　仁餘（平）反　コトシ　モシ　カクノコトク／キ　シタカフ　ムカシ　サキ　ユク　ハカリ　タトヒ　ワレ　ヒロシ　シカモ　ナヲ　イマニタリ　ニタリ　シカルヲ　スケ　禾ニヨ（平上）（観智院本類聚名義抄／佛中四ウ4、006-4）

＊和訓の声点は省略した。

分類体裁としてイロハ順の和訓検索を採用した初期段階においても、音読みを必要とする語彙があったこと、すでに前章で指摘したところである。訓読語に対して和訓を付す場合、仮名書きを用いることに抵抗はなかったが、字音語については和訓とは違う表示を求めたのではないか。訓読語と字音語とが対比されて、峻別できるという点でも合理的である。その際、和名類聚抄に散見する「名如字」のような表記を参考としつつ、独自に「如音」という表記を使った可能性がある。ただし、相当に体系的な字音の知識がない限り、この「如音」では字音の内容そのものを把握できないわけであり、次なる工夫が必要となっていく。反切や同音字注を付載することになるのは、音注表示「如音」の次なる段階であろう。しかし、これらは何らかの出典を持った文献の孫引きが多く、やはり字音知識がないと音注の理解ができなかったと思われる。結局は、字音語についても仮名音注を採用する段階に至ったと認められよう。以下、その状況を確認するため、二巻本世俗字類抄において確認した四一例の「如音」を［表1／1～3］に掲げる。

独自の音注「如音」を付すのは、見出し語の漢字に対して代替すべき和訓がない、あるいは音読みが定着して久しい場合と予想したが、四一例の実態はどうか。ラ行音に関わる［表1／1］例01は後に分析することとして、例02から見ていく。当該例は「鼻と上唇との間にある中央の凹み。鼻溝。」の意味で、音読みを専らとする。仮名音注ならば「ニンチウ」となろう。二巻本色葉字類抄には「ニムチウ」を見出す。なお、読みとしては、濁音を含む「ニンヂウ」という字音の可能性もあるが、ひとまず両者とも認めておく。和名類聚抄によれば、「鼻柱」を「波奈波之良（はなばしら）」と訓読するが、「木溝」には和訓を示してはおらず、黄帝内經[24]をもって「木溝即人中也」と付注する。ただし「木溝」を「ニムチウ」と音読みはできない。字類抄諸本が「木溝」に「同」と付注するのは和名類聚抄が示す当該の出典などを参照したのであろう。七巻本世俗字類抄の場合、この「如音」を仮名音注に代替えするか、捨象するか、いずれかを選択した。しかし、当該例だけは「如音」を掲出字の下左側に保持している。字音語「人中」と「同」と付注してある「木溝」の関係が理解できないために、そのまま「如音」を書写した可能性がある。

人中　如音　木溝　同

（尊経閣文庫蔵二巻本色葉字類抄／上上・仁・人躰二三オ2）

鼻柱　黄帝内經云木溝在鼻柱下　和名波奈波之良

（元和古活字本和名類聚抄／巻三・鼻口類第三一・五オ3）

人中　黄帝内經云木溝即人中也

（元和古活字本和名類聚抄／巻三・鼻口類第三一・五ウ2）

【表1／1】

01 上・呂・辞字五オ8／一〇ウ6	02 上・仁・人躰一〇オ2／二一オ3	03 上・仁・雑物一〇オ5／二一ウ4	04 上・知・人事一六ウ8／三八オ2	05 上・知・人事一六ウ8／三八オ2	06 上・知・辞字一七オ6／三八ウ7	07 上・知・辞字一七オ7／三八ウ8	08 上・乎・員数二〇オ6／四七オ2
論 録 勒	人中 木偏 鼻	逆 燎 如意 荷	誓 盟 忠 竈 智詠	負 備	北 象 鎖 壓	持 樁 經 布 桙 木 椽	多 衆 條 億

09 上・加・人事二四ウ6／五七オ1	10 上・加・員数二六オ6／六〇オ2	11 下・為・飲食四八ウ1／七ウ6	12 下・為・人事四八ウ2／七ウ8	13 下・為・雑物四八ウ3／八オ3	14 下・為・員数四八ウ3／八オ7	15 下・能・人事四九オ7／一〇ウ2	
賢 豪	合 銓衡 个	褻 撤	居 恭 唯 椙 威	複 撥 具 韻	囲 木	祝 繁 賀 能 藝	

【表1／2】

16 下・久・地儀五三ウ1／二一オ6	19 下・古・人倫六四ウ7／五〇オ4	22 下・江・人事六七オ7／五六オ8	25 下・弓・飲食六八オ8／五九ウ2	28 下・幾・人事七八オ4／八二オ7	17 下・久・地儀五三ウ3／二一ウ1	20 下・古・人事六五オ5／五一オ1	23 下・江・辞字六七ウ2／五七オ1
26 下・弓・雑物六八ウ3／六〇オ2	29 下・幾・雑物七八オ6／八二ウ4	18 下・久・地儀五三ウ3／二一ウ1	21 下・江・人躰六七オ7／五六オ6	24 下・弓・飲食六八オ8／該当なし	27 下・左・辞字七六オ4／七七ウ7	30 下・女・植物八一オ5／九〇ウ3	

【表1／3】

31 下・女・人事八一オ8／九一オ7	32 下・志・地儀八四オ5／九九オ1	33 下・志・動物八四ウ7／一〇〇オ5	34 下・志・人倫八四ウ8／一〇〇オ7	35 下・志・人倫八五オ1／一〇〇ウ1	36 下・志・人倫八五オ1／一〇〇ウ2	37 下・志・雑物八五ウ1／一〇一ウ2
恵明府命 如云	磁石吸針也 庄田城 如云 省 同	康尊 康角 初生也 馬駒也 四系 ウウ 廟香 如云	師匠士 如云 舅 夫ト 父云也方 三月服也 假	親 傍 近類 臣 如云 大小醜也 警児之詞也	衆 三人 為 如云 戚親 外	史 如云 三代 楯
40 下・志・雑物八五ウ1／一〇一ウ2	41 下・志・辞字八六オ3／一〇三オ1					
章 竹 如云 編子 衣	令 如云 使 遣 俾 敬 謝 辞 如云 辞不安也					

人中　如音　木溝　同

（尊経閣文庫蔵七巻本世俗字類抄／巻一・仁・辞字二八オ6）

次に［表1／1］例03は例02の三行後、同じ仁篇の雑物部にある。これも字音による把握をする熟字で、説法や法会に講師・導師が所持する道具を意味する。和名類聚抄にも和訓はない。七巻本世俗字類抄では「如音」を継承せず、何も注記はない。東大本の該当部分を参看すれば、仁篇雑物部に掲げる七例中、「褥」「如意」二例が字音語であり、他の訓読語に混じって配置している。いわゆる呉音読みである「褥　ニク」は夙に字音語で定着していたと認められるが、この仮名音注は世俗字類抄編纂の当初にはなかったと推測する。ほぼ同時期に成立した梁塵秘抄(25)には、敷物の意味で「にく」を用いた例が見つかる。当時流行した今様に使われるということは、日常的な語として認識されていた可能性が高い。それ対して、当該の「如意」は漢文中における「意の如し」のような訓読の場面が想起され、誤解を生みやすい。その錯綜を回避するために音注表記の「如音」が必要であった。

如意　梁劉孺有如意銘孺而遇切少小幼稚也又生也又姓

（元和古活字本和名類聚抄／巻一三・僧坊具第一七一・四ウ4）

冬は山伏修行せし、庵とためし木の葉も、紅葉して散り果てて、空さびし、褥（にく）と思ひし苔にも、初霜雪降り積みて、岩間に流れ来し水も、氷しにけり、

（梁塵秘抄／巻二・僧歌十三首・305番歌・087-04）

錦　褥　ニク　膠　ニカワ　和炭　ニコスミ　鍛冶炭也　庭燎　ニハヒ

如意　如音　荷　ニナフ

（東京大学国語研究室蔵二巻本世俗字類抄／上・仁・雑物一〇オ5）

庭燎　ニハヒ　如意　ニヨイ　荷　ニ　如紫　ニョショ

（尊経閣文庫蔵二巻本色葉字類抄／上上・仁・雑物二三ウ2）

燎　ニハヒ　如意　荷　ニナフ　ハチス／カ

（尊経閣文庫蔵七巻本世俗字類抄／巻一・仁・雑物二九オ2）

例02・03のように、訓読みがなく音読みを専らとするか、あるいは音読みが早くに定着しているという条件に該当する諸例を以下に掲げる。これらは地儀・植物・動物・人倫・人躰・飲食・雑物・員数の各部に所属し、具体的な事象や事物を表している。

［表1／1］02・03・08・10・11・13・14

［表1／2］16・17・18・19・21・24・25・26・29・30

［表1／3］32・33・34・35・36・37・38・39・40

ただし、例38には疑義が残る。音注の表記が「音（字形上は六のように書かれる）」とのみあり、「如」を含まないためである。「如音」を付載した段階では存在しなかった可能性がある。前後の37・39・40には「如音」があり、この「音」表記は後に加えられたものか。

…　史　如音／三史竹楯　頌　音／哥也　什　如音／篇　章　如音／竹　…

（東京大学国語研究室蔵二巻本世俗字類抄／上・仁・雑物八五オ8～八五ウ1）

人事部に所属する04・05・09・12・15・20・22・28・31の諸例は、人間の行為に関わる事柄を表している。人事部は訓読語を主体に掲出し、そこに字音語を加えて配することが多い。よって、他の部よりも字音語を判別しやすいが、紛れる場合をも配慮をして「如音」を付

載したと考える。例04・05・09が含まれる人事部を示して、代表とする。

契　チキリ／約同　誓　チカヒ　盟　同／矢同　忠　寵　チョフ／ウツクシム
智謀　如音　賃　如音　秩　任也
（東京大学国語研究室蔵二巻本世俗字類抄／上・知・人事一六オ8）
賢　カシコシ　豪　如音　頑　カタクナシ　…
（東京大学国語研究室蔵二巻本世俗字類抄／上・知・人事二四オ6）

件の［表1］で残った01・06・07・27・41は辞字部所属の諸例である。辞字部は同じ和訓に対応する異なる漢字群、すなわち同訓異字を並べていく構成が基本となっている。その場合には単字を旨とし、ここに字音語が含まれることもある。具体的に分析するため、例06・07を含む辞字部全体を掲げる。やはり同訓異字の訓読語が列挙され、その和訓は動詞や形容詞などの用言である。その中に当該の「鎮　如音」「持　如音」が出てくることから見て、サ変動詞の字音語を示そうとしたようである。二巻本色葉字類抄は「如音」を採用せず、明らかに仮名音注「チンス」「チス」と読みを付けている。他の諸例も同様の分析結果を得る。

落　チル／散同　近　途同／隣幾等　殆　同　凶　チサヒ　小　チイサシ
促　チカツク　鍍　チリハム　鏤　同　比　チカシ／出家　鎮　如音／厭也
持　如音　憊　チ、ム　糸＋豆　糸＋豆用席等也　布桓　同／木　扌＋糸
同
（東京大学国語研究室蔵二巻本世俗字類抄／上・知・辞字一七オ6～7）
持　チス　近　チカシ　隣　親　…　鎮　チンス　小　チキサシ　…
（尊経閣文庫蔵二巻本色葉字類抄／上上・仁・辞字三八ウ6）

4　ラ行音語彙の音注

前章の分析において、例01を別途扱うことにしたのは理由がある。これはラ行音に関わる語彙という点を考慮したためである。日本語の基本的な特徴の一つとして「漢語や外来語などの移入語を除外すれば、第一音節にラ行音が配置されることはない（＝語頭にラ行音は立たない）」という事項がある。よって、呂・利・留・礼・良の各篇に和訓語彙は存在しないことになり、すべて字音語であるから、特に音注表記を必要とはしないはずであろう。しかし、実際には「如音」表記だけでなく、仮名音注も付載されている。次に当該の例01を含む呂篇全体（音注表記以外は省略し、部には亀甲括弧を付した）を掲げる。

呂字部
〔地儀〕樓　蒼龍
〔人倫〕論匠　〔人躰〕癭瘻
〔人事〕禄論　簾子　籠子　同　樓子　禄物禄
〔雑物〕轆轤　ロクロカマ　鏇　艫　櫓　同　炉　籙
〔光彩〕緑青　〔辞字〕論　如音　勒　ロクス　〔重點〕録〻
〔疊字〕漏剋　漏宣　漏失　露頭　嘘胡　ロコ　虜掠　論儀
路次　路頭　露膽　魯愚　鹵簿　魯鈍　弄言
〔諸寺〕六波羅　六角堂　〔官職〕録　漏
（東京大学国語研究室蔵二巻本世俗字類抄／上・呂・五オ3～五ウ3）
引　イ丶　論　呂丶　本　ホ丶　半　ハ丶　文　モ丶
（大東急記念文庫蔵金光明最勝王経音義承歴三年書寫／二ウ3）
＊「丶」は中国語音の末子音-nを表示している。
＊中国語の音節構造はIMVF／T(?6)で示される。

呂篇は確かに字音語のみで構成されており、その辞字部は字音語二例を掲げる。ただし、辞字部は基本的に同訓異字で構成する役割を担っていること、前章で分析したごとくである。よって、呂篇辞字部には訓読語がなく、字音語のみであることに注意を促す必要があった。このことを踏まえて、ラ行語彙初出の例01「論」に「如音」表記が付与されたと言える。この他の辞字部ラ行語彙を示す。留篇は該当例がなく、他のラ行各篇の掲出字も少ない。良篇を除外すると、すべて字音語である。ラ行語彙初出である呂篇のように「如音」はない。訓読語への誤認は起きないと判断したものか。礼篇に仮名音注「レンス」を見出すが、世俗字類抄の編纂初期段階には付注されなかったと思われる。その撥音表記「ン」が確立していたかどうか疑義があることからもわかる。教学における教典や典籍の字音把握という点に配慮は必要であるが、金光明最勝王経音義(27)における「ɴ」n末子音や「レ（に近似した字形）」ŋ末子音の表示方法も参看に値する。同じ礼篇辞字部「凌」に付された「レウス」は東大本になく天理本にはある。両本は共通の（あるいは近似した）親本をもって書写した可能性が高いので、単純な書写の見落としかもしれない。

利篇〔辞字〕理　領　略　省略
（東京大学国語研究室蔵二巻本世俗字類抄・上・一八ウ4）
留篇〔辞字〕＊該当なし
礼篇〔辞字〕練　レンス　凌　凌人也　料　理也
（東京大学国語研究室蔵二巻本世俗字類抄・上・三五オ1）
礼篇〔辞字〕練　レンス　凌　レウス／凌人也　料　理也
（天理大学附属図書館蔵二巻本世俗字類抄・上・三五オ1）
良篇〔辞字〕被　見同／所同　等　ラ　慨　ヨクス
（東京大学国語研究室蔵二巻本世俗字類抄・上・四二オ6）

さて、字音語のみで構成されているはずのラ行語彙にあって、良篇辞字部は状況が異なる。当該三例は漢文訓読における表現を示している。第1章で述べたように、原撰本諸本から世俗字類抄への改編に際して、漢文の訓読や作成に資する構成を加えるという方針があったことを確認できる。

被　↓　受身の助動詞未然形「ラ」
等　↓　複数を表す接尾辞「ラ」
慨　↓　ク語法の類推から派生した表現
（「ヨクス」→「ラクハ」の誤写）

ラ行語彙における「如音」や仮名音注の付載状況を分析してきたが、ここで両者の先後関係を物語る端的な例を、同じラ行語彙に見出す。院政期の常用語としては「ルハン」と読んだ「露盤」である。類聚名義抄は「俗云ルハン」を掲げ「ロハン」はない。常用語としては「ルハン」を認知していたことがわかる。「二巻本世俗字類抄」の成立初期には、この字音「ルハン」を基準に分類されたゆえ、留篇雑物部にある。某者が仮名音注を加えた増補改訂の過程の際に、常用的な音読み「ルハン」を知らず、「ロハン」と付載した可能性がある。これは成立初期に仮名音注がなかったことの傍証である。いまだ前後関係が明らかではないが、いわゆる節用文字にも「ルハム」がある。二巻本色葉字類抄も同様。字類抄諸本にあって、二巻本世俗字類抄のみが「ロハン」である。七巻本世俗字類抄では、地儀部に所属を移し、仮名音注は「ルハン」に修正している。

露盤　ロハシ　珞具　（→仮名音注は「ロハン」の誤認）
（東京大学国語研究室蔵二巻本世俗字類抄／上・留・雑物一九ウ4）
露盤　ロハン　塔具
（天理大学附属図書館蔵二巻本世俗字類抄／上・留・雑物四五オ5）

露盤　ルハン　珞具
（尊経閣文庫蔵七巻本世俗字類抄／巻二・留・地儀一一オ3）
露盤　ルハム　塔具
（徳富猪一郎蔵節用文字／留・雑物二オ7）
露盤　ルハム　塔具
（尊経閣文庫蔵二巻本色葉字類抄／上上・留・雑物四四オ5）
露盤　ルハム（去上濁上）　塔具
（尊経閣文庫蔵三巻本色葉字類抄／上・留・雑物七九オ6）
露　説文曰露潤澤也　…
（広韻／路：洛故切十三／去声暮韻）luʌ^{3}（?∞）
露盤　俗云ルハン（去上上）
（観智院本類聚名義抄／僧中八ウ4、014-4）

もう一つ近似した例を指摘できる。二巻本世俗字類抄の場合、「漏」は東大本・天理本ともに留篇雑物部に所属する語彙である。また、呂篇畳字部に「漏剋」の熟字が存在する点も同じである。つまり、次のように字音の把握していたことになる。ただし、両者に意味上の相違があったかどうかはわからない。

漏（刻）　↓　る（こく）
漏剋　↓　ろこく

漏　ル　漏利以銅爰水刻節晝夜百刻
（東京大学国語研究室蔵二巻本世俗字類抄／上巻・留・雑物19ウ4）
漏剋　漏宣　漏失　露頭　…
（東京大学国語研究室蔵二巻本世俗字類抄／上巻・呂・畳字5ウ4）
漏　漏刻以銅援水刻節昼夜百刻
（天理大学附属図書館蔵二巻本世俗字類抄／上巻・留・雑物45オ5）
漏剋　漏宣　漏失　露頭　…
（天理大学附属図書館蔵二巻本世俗字類抄／上巻・呂・畳字11オ3）
漏刻　ロコク　臚句　ロク　路次　ロシ
論議　ロンキ　漏宣　ロセン　漏失　ロシツ
（尊経閣文庫蔵七巻本世俗字類抄／巻一・呂・畳字15オ1）

東大本の注には「刻・受」を「利・爰」とする誤写もあるが、仮名音注「ル」を付載している。二巻本世俗字類抄の成立初期には仮名音注がなく、この「漏」を「ロウ」と誤認されないよう、増補改訂段階で「ル」を補填したのであろう。天理本の書写者は「ル」ではなく、「ロ」あるいは「ロウ」と認めたが、確信なくて仮名音注を捨象したものか。七巻本世俗字類抄では、留部に当該例はなく、呂篇畳字部に「漏刻」を掲出するのみである。室町中期に増補改訂がなされたと推定する七巻本では、掲出語彙の見直しが図られていること、言うまでもない。蛇足ながら、「漏刻」「漏剋」の意味を掲げる。

ろう－こく【漏刻・漏剋】①水時計の一種。底に穴のある壺（漏壺）の中に水を入れ、漏箭ろうせんを置き、水の漏出につれて漏箭に刻む目盛で時刻を見るもの。また、別の壺からもれる水を受けて、水がたまるにつれ浮き上がる漏箭の漏刻を読んで時刻をはかるものもある。ろこく。天智紀「夏四月……を新しき台うてなに置く。始めて候時ときを打つ」②漏箭ろうせんの目盛の称。るこく。（広辞苑第

六版電子版）

なお、切韻系韻書(?8)の代表として広韻の注を参照すれば、直接の引用ではないにしても、世俗字類抄の掲げる注の出典が判明する。色葉字類抄も「ル」という仮名音注を付しているが、説明は端的に整理されている。類聚名義抄は「ロ」を和音とする。字音「ロウ」は正音という認識があるのに比して、すでに定着して久しい字音が「ロ」であった。

漏　ル　器也　鑄師具
（尊経閣文庫蔵二巻本色葉字類抄／上上・留・雑物四四オ5）
漏　ル（去）　器也　鑄師具
（尊経閣文庫蔵三巻本色葉字類抄／上・留・雑物七九オ6）
漏　漏刻説文曰以銅受水刻節昼夜百刻爾雅曰西北隅謂之屋漏又禹耳三漏
（広韻／陋：盧候切十三／去声候韻）lʌu³
漏　音陋ロウ　モル（上平）　ウス　シタ、ル　ウカツ　カケタリ　ケカス（平上濁）
禾ロ（平）
（観智院本類聚名義抄／法上七ウ2、012-2）

二巻本世俗字類抄の字音語、中でも独自の音注「如音」を分析することで、字類抄諸本における増補改訂の様態が見えてきた。すなわち、二巻本「色葉和名」ともいうべき体裁で編纂された原撰本系諸本をもって、より常用的な語彙の精選と増補を目指したのが二巻本世俗字類抄と認められることである。その成立初期に独自の音注「如音」を加えたのは、基本的な編纂の方針である訓読語のイロハ順塊集にあって、字音語も語彙として欠くことができず、必要に応じて、これを表記する方法が模索された状況を示している。

『原撰本』系諸本の段階（音注「如音」の付載？）
↓「色葉和名」による和訓語彙の塊集と分類
『世俗字類抄』（二巻本）編纂の段階
［成立初期］　↓　音注「如音」の付載
［増補改訂一期］　↓　反切・同音字注・仮名音注の添加
『世俗字類抄』（七巻本）編纂の段階
［増補改訂二期］　↓　全音注を仮名音注へ変換

5　おわりに

二巻本世俗字類抄における「如音」という独自の音注について、分析結果を集約しておく。

A　「如音」は成立初期に付載された。「音にしたがふ」と解釈する。見出し語たる掲出字を音読みせよという指示と考えられる。

B　基本的には、見出し語の掲出字に対して和訓がなく訓読みしない場合、あるいは音読みが定着して久しい場合に付したと認められる。

C　一例を除き、七巻本には継承されない。仮名音注に代替された13例を見出す。

＊［表1／1］例02「人中」が例外である。
＊［表1／1］例28「盖」は「如音」（字形上からは「如云」）を「雲」と誤認している。

なお、二巻本世俗字類抄の成立初期においては、和訓を塊集して編纂すること、すなわち「色葉和名」に主眼があり、字音語については「如音」以外に注記がなかった可能性がある。この点、仮名音注の全数調査を俟って、再度分析したい。

［注］

（1）現存する字類抄諸本（世俗字類抄や色葉字類抄などを包括した呼称）を示す。

【原形本】

［イ］川瀬一馬蔵本

▼鎌倉時代初期の書写になると推定する零本。原形本と認定できるかは不明。

【節用文字】

［ロ］お茶の水図書館蔵本（成簀堂文庫旧蔵）

▼二巻本色葉字類抄を平安時代末期か鎌倉時代初期に書写したともいわれる零本。

【二巻本世俗字類抄】

［ハ］天理図書館蔵本（松平定信旧蔵）

▼江戸時代中期以降の書写か。

［ニ］黒川家蔵本

▼元治元年晩夏中旬に黒川春村が書写。

［ホ］川瀬一馬博士蔵本

▼黒川家蔵本［ニ］の手写本。

［ヘ］東京大学文学部国語研究室蔵本

▼奥書のない黒川家旧蔵本であり、黒川家蔵本［ニ］とは別の一本。

【三巻本世俗字類抄】

［ト］水戸彰考館本

▼永正十二年の書写本。戦災で消失したという。これは、東京大学文学部国語研究室蔵二巻本の表裏に附箋があり、「文学博士橋本進吉云世俗字類抄三巻水戸彰考館ニアリ永正ノ寫本ニシテ順識トアリ」による。

【七巻本世俗字類抄】

［チ］尊経閣文庫蔵本

▼巻三を欠く六冊本。

【二巻本色葉字類抄】

［リ］尊経閣文庫蔵本

▼正和四年と応永三十年との二度に渡る伝写を経て、永禄八年に書写。

【三巻本色葉字類抄】

［ヌ］尊経閣文庫蔵本

▼院政期末あるいは鎌倉初期の書写ともいうが、確かではない。中巻と下巻の一部を欠く。欠落部分については黒川家蔵本の［ル］にて補う。

［ル］黒川家蔵本

▼江戸中期の書写か。

（2）字音注記である「同音字注」という述語は小松英雄氏の説による。「類音」「直音注」と称する場合もある。小松英雄「平安末期における漢音の一断面」（国語と国文学、四七巻一〇号、一九七〇年）

（3）表記された字形としては「如云」あるいは「如六」のように見えるが、これは「如音」の字形省略と認められる。同音字注の場合でも、「六某」という字形をもって、「音某」を表している。類聚名義抄などにも同音字注の字形省略が多数存在する。

（4）次の複製を参照した。

・原装影印版 古辞書叢刊「世俗字類抄 七巻本」（雄松堂書店、一九七三年）

（5）次の複製を参照した。

・東京大学国語研究室資料叢書13「倭名類聚抄京本・世俗字類抄二巻本」（汲古書院、一九八五年）

（6）次の複製を参照した。

・三宅ちぐさ「天理大学付属図書館蔵 世俗字類抄 影印ならびに研究・索引」（翰林書房、一九九八年）

（7）次の複製を参照した。

・尊経閣影印善本集成19「色葉字類抄二・二巻本」（八木書店、二〇〇〇年）

（8）次の複製を参照した。

・原装影印版 古辞書叢刊「色葉字類抄：原形本鎌倉初期筆零帖」（雄松堂書店、一九七七年）

（9）注（7）文献、峰岸明氏による解説の10頁下段5～11行目。この五箇条は、注（5）文献の解題（550頁12～18行目）において、同氏が同様の見解を示されたが、その後の研究成果を加えて修正をしたものである。

（10）注（7）文献、峰岸明氏による解説の11頁上段1～5行目。

（11）陸方言が編纂した原本「切韻」から宋代の「広韻」に至る一群の韻書を指す。以下の複製本を参看した。

・陳彭年等編「校正宋本廣韻」藝文印書館、一九七四年）

・劉復等編「十韵彙編」（台湾学生書局、一九七三年）

・龍宇純「唐写全本王仁昫刊謬補缺切韻校箋」（香港中文大学、一九六八年）

（12）二戸麻砂彦「二巻本世俗字類抄反切音注考」（山梨県立女子短期大学紀要34、

二〇〇一年）

（13）二戸麻砂彦「字類抄諸本の改編と反切音注」（國學院雑誌一〇二巻第一一号、二〇〇一年）

（14）字類抄諸本の基本的な編纂構造を次に示す。これは「漢家以レ音悟レ義、本朝就レ訓詳レ言、而文字且千訓解非レ一、今揚二色葉之一字一為二詞条之初言一、凡四十七篇、分二為両巻一、篇中勒レ部、為令二見者不労一レ眸也。」（三巻本色葉字類抄、上巻1ウ2～5）という序、あるいは「已上部類同二伊字一」（同、上巻1オ7）と書かれた目録末尾に基づく。いまは二巻本世俗字類抄を例とする。

「篇」→　伊・呂・波・仁・保・倍・登・知・利・奴・留・乎　…

「部」→　天象・地儀・植物・動物・人倫・人躰・人事・飲食　…

「類」→　歳時・居処居宅具・植物具・躰・鬼神類・病瘡類　…

（15）注⒁　参照。

（16）次の複製を参照した。

・諸本集成「倭名類聚抄」本文篇・索引篇（臨川書店、一九七一年）

・東京大学国語研究室資料叢書13「倭名類聚抄京本・世俗字類抄二巻本」（汲古書院、一九八五年）

（17）情報機器における日本語表示の規格としては、2004JIS（JIS X 0213: 2004）が策定され11223文字が規定されているが、これで表示できない漢字は当然存在する。いわゆるJIS外漢字表示方法については、以下の論文に准拠した。部首や諧声符など、漢字の字形パーツを＋記号を使って組み合わせる方法である。当該の漢字には傍線を付してある。

・二戸麻砂彦「パソコンにおける漢字処理／試論」（山梨県立女子短期大学紀要28、九～一八頁、一九九五年）

（18）今泉忠義「源氏物語 全」（桜楓社、一九七七年）

（19）池田龜鑑「源氏物語大成」普及版（中央公論社、一九八四年）

（20）日本古典文学大系10「宇津保物語一」（岩波書店、一九五九年）

（21）新日本古典文学大系42「宇治拾遺物語・古本説話集」（岩波書店、一九九〇年）

（22）次の複製を参照した。

・正宗敦夫編「類聚名義抄第一・二巻」（風間書房、一九七五年）

・天理図書館善本叢書「類聚名義抄観智院本」（和書之部32～34、八木書店、一九七七年）

・宮内庁書陵部蔵「図書寮本類聚名義抄」本文編・解説索引編（勉誠社、一九七六年）

（23）当初「如音」を「音にしくあれ（しかれ）」と読んでみた（「二巻本世俗字類抄における『如音』という音注」平成20年度 國學院大學国語研究会前期大会 口頭発表）が、和田利政國學院大學名誉教授から「音にしたがふ」とも読む可能性をご教示いただいた。

（24）広辞苑第六版CD-ROM版の説明を掲げておく。

【黄帝内経】（コウテイダイケイとも）中国最古の医学書。古く黄帝外経と内経の2書があったとされるが、その原本は伝わらず、現存する「黄帝内経」としては唐代に楊上善が注を加えた「黄帝内経太素」30巻（うち25巻の平安末期写本が京都仁和寺に国宝として所蔵）がおそらく原形に近く、また隋の頃「素問」と「霊枢」に二分されたテキストが宋の学者の校訂を経て「新校正素問」として流布、さらに別に「黄帝内経明堂」13巻（楊上善注）がある。素問は人体の生理・病理を説き、霊枢は鍼灸など治療を説く。太素は両者の内容を含む。黄帝と岐伯ら6名医との問答形式で構成。中国医学第一の古典として日本でも重視されている。

（25）新日本古典文学大系56「梁塵秘抄・閑吟集・狂言歌謡」（岩波書店、一九九三年）

（26）等韻学の述語である声母・韻母との関係も加えておく。

I	initial	頭子音 ↓	声母
M	medial	介音 ↓	韻母
V	principal vowel	主母音 ↓	韻母
F	final	末子音 ↓	韻母
T	tone	声調 ↓	韻母

（27）次の複製を参照した。

・古辞書音義集成12「金光明最勝王経音義」（汲古書院、一九八一年）

（28）中古音については三根谷説の推定音によった。

・三根谷徹「中古音の韻母の体系―切韻の性格―」（言語研究、三一号、一九五六年）

・三根谷徹「越南漢字音の研究」（東洋文庫、一九七二年）

・三根谷徹「唐代の標準音について」（東洋学報、五七巻一・二号、一九七六年）

・三根谷徹「中古漢語と越南漢字音の研究」（汲古書院、一九九二年）

（平成20年10月28日）